（旧和商）

社団法人 和商同窓会会報

（新和商）

（発行所）和歌山市砂山南３丁目3-94　県立和歌山商業高校内 TEL 36-6456　社団法人和商同窓会　（第28号）平成11年３月１日（月曜日）

21世紀へのバトンタッチ

「和」と「力」の結合 文武両道をきわめる

学校長 中尾 憲一

一九九九年が始まりました。20世紀も残すところ2年となりました。

お正月二・三日と恒例の大学箱根駅伝をテレビで観戦しました。今年は第75回目でした。出場大学15校がそれぞれ母校の栄光を、個人の限界への挑戦の中で、一本のタスキに託した力走は多くの人びとを感動させます。

駅伝はタスキがつながってはじめて成立いたします。途中どんなアクシデントがあるか予想できません。個人個人の力量は重要な要素でしょうが、何よりもまずタスキをつながなければならないという本当に過酷なレースです。往路5人・復路5人が一本のタスキにつながれたグループ競争でもあります。それは総合の「和」、個人の「力」の結集です。

四年前、前校長から、「和商」の旗をバトンタッチされました。ずっしりと重みのある歴史と伝統の大旗です。社会の変化、教育改革は想像もできなかったスピードで進んでいます。生徒にとって何が一番良いのか、多くの「流行」も追い求めました。そんな中で、和商の「不易」は何かを皆さんと一緒になって考えました。そして伝統の中で引き継ぐものは、「文武」をきわめるに到達しました。そのための基礎基本を大切にするために、「あいさつをしよう」「遅刻しないように」「清掃を徹底しよう」の三点を目標に掲げました同窓会・PTAの皆さんのご協力をいただき、何とか目標達成に向け前進している状況です。

また長年の夢であった校地の整備事業も三月に完成する予定になっています。同窓会の特別のご好意をいただき南側からの通用門も設置することになっています。同時に長い間貸用していました同窓会所有の土地もお返しすることができるようになりました。あのテニスコートで育った多くの若者たちは、今は社会の第一線で活躍しています。本当に後輩たちのためにありがとうございました。

和商の歴史は94年を過ぎようとしています。同窓会の存在は周囲に輝きをはなち、人々の心を和らげ、社会に潤いを与えてくれています。やがて21世紀初頭に迎える創立百周年へのたしかなバトンタッチが、「和商という一本のタスキ」の引き継ぎです。きっと後を継ぐ人たちが力一杯力走してくれることでしょう。

このすばらしい歴史と伝統に、同窓会・PTA・学校が一丸となって大いに声援を送れる幸せを胸一杯に感じながら、総合の「和」と生徒の「力」に期待しています。

関東和商同窓会

新第48期生評議員決る

平成十一年三月卒業生

関東和商同窓会支部長として本年も一層の努力を重ねて参りたいと存じます。本年も会報を曲がりなりにも出す事が出来ました。これも一重に皆様のご支援の賜物と感謝致しております。また本年も有志による恒例の忘年会が行われ皆様からご提案を頂戴し又皆様のお便りから抜粋して会報を作成させて頂きました。まず辻岡幹事から総会の時期と参集者について特に参集者は各期に代表者の出席により総会を実施して、皆様のお役に立つ同窓会としてのご提案を頂く事が大切である旨の提案に対し参加者皆様の賛同を得まして、次回は辻岡幹事から各期にご連絡して実施することになりました。

ご了承の程をお願い申し上げます。なお、和歌山県人会について接触を保つ必要があるとの提案に中尾副会長が将来折衝をして頂く事と致しました。又この度前支部長の酒井さんがお亡くなりになり通夜・葬儀に参加弔辞を理事長に代わり代読致して参りました。

一組＝◎松岡藍砂・桐川恵美、二組＝石松一晃・◎中井健二、三組＝三木　恵・今村仁志、四組＝深町成司・中野勇子、五組＝伊丹武・高岡鉄也、六組＝片山いずみ・岡本　梓、七組＝山本一馬・河嶌絵理香、八組＝岩下　愛・中谷佳和、九組＝楠林史生・高宮秀和、（◎印は代表評議委員）

関東和商同窓会 支部長 貴志 透

平成の世で九たび

私が32期同窓会のお世話をしたのは平成2年の始めの頃で、当時の人々の生存すらわからず学校の事務所を尋ね同窓会の名簿をコピーしてもらい所在を確認したのが始まりで、過去に世話をしてくれた2・3人を尋ね今一度会合を持つようにしたらどうだろうかと言う事で、平成2年4月に新和歌浦の万波で実施したのが平成の始まりである。

以来本年で第9回目の会合を実施した。

年齢のせいもあり病気療養中の人、目の不自由な人、足の故障の人が多く健全な人が少なく今回の参加者は14人のみとなりました。中には元気であるが同窓会に出席してくれない方もあり残念でなりません。（80才にも手が届く様になるとやむを得ない事でしょう。）

幹事のあいさつの後は互いに健康を確めあったり軍隊での苦しかった事、学校時代の楽しい思い出、現在の生活状態等、様々な話しに夢中になる。中にはカラオケで歌う人、学校時代の先生のアダナの数え歌を披露する者、互いに励ましあいながら楽しい一時を過ごす。これが我々のパターンであるが皆さんの同窓会も同様な事でしょう。

しかし、年々一人去り二人去り同窓の皆さんが少なくなって行くのが身につまされます。年齢を重ねると会合を開くのも限度があり80才のときに今一度考えを新たに実施の有無を確め合う事とし開催出来た事を喜ぶと共に来年の再会を誓いあった。

旧32期 眞田 信昭

商二九会の近況

今年も新和歌浦の「萬波」にて第十六回商二九会を二十一名が参加して開催しました。

十一時十五分に全員が集合して、三階の宴会場「朝日」の舞台をバックに安原君のカメラに収まった。

十二時一〇分例年の通り津田君の司会で開会、開会の挨拶で炭江君は「人生の転換期はNの二乗で、三十六からは働く時、六十四からは頭を下げる時、八十一からは自由の時で、八十回記念大会を迎えた夏の甲子園と共に歩んできた私達は、常に体を大切にして気を楽に持って元気でこの会を何時までも続けられる様に心掛けましょう」と話してくれた。

一同起立して物故者のご冥福を祈って黙禱を捧げ、続いて津田君より欠席者の近況報告をされた。

十二時二十分安田君の音頭で一同のご多幸と健康を祈り乾杯をして宴会が始められた。食事をしながら久し振りの再会に懐かしい歓談が長く続いて、十三時三十分よりカラオケが始められ、今年も食事中に係わらず安原君はカメラ片手にスナップ写真を撮ってくれた。西君、古城・むらさき雨情、炭江君、北帰行・琵琶湖周遊の歌・麦と兵隊（堀川君）津田君、武田節、柳ケ瀬ブルース。堀川君、無情の雨・別れのブルース。中西君、みちづれ。狩野君、紬の女、玉置君、さよならの伊勢音頭。

十五時、吉田の再会を約する閉会の挨拶に続いて安原君の発声で万歳を三唱し、十五時三十分来年も亦元気で会えることを念じつつマイクロバスに乗った。

第二十九期生 吉田 旬一

毎日を大切に

信頼と伝統のなかで よき思い出づくりを

一九九六年四月に私は、この県和商の生徒として三年間の学校生活に大きな希望を膨らませて入学してきました。

県和商は九十余年の伝統ある歴史と共に新しい歴史も刻んでいます。校内の設備面では、和商会館や視聴覚教室、図書館、格技場、そして昨年の春に開設した生徒ホール等学校生活を快適に過ごすに充分な設備が整えられています。又、文化クラブやスポーツクラブでは、県の代表として多くの生徒が活躍しています。

学習面では、それぞれの専門知識を身につけるために学科形態が分かれており、資格取得を目的とした授業もあります。又、授業内での社会見学や企業の方々が直接来て下さり、企業内のことや現在の社会情勢について話して下さいます。

私は、このようなすばらしい高校で一般知識と社会で必要とされる多くのことを学びました。

県和商での三年間の学校生活の中で私を一番大きく成長させたのは日々の努力だと思います。日進月歩という言葉があるように、私もこの県和商でいろいろな友人や先輩、恩師に支えられて努力を積み重ねてきました。この日々の努力がなければ絶対に今の自分はなかったように思います。私はまた、県和商にもそれと同じことがいえるのではないかと思います。私達の大先輩にあたる遠い卒業生の方々から昨年卒業していかれた先輩まで長い年月をかけ、信頼と伝統を築き上げてこられました。それが今の県和商に直接結びついているのだと思います。

私は県和商で過ごした三年間はすばらしいものであったと誇りに思います。そして高校生活の輝かしい思い出を胸に卒業します。

これからの新しい県和商を築き上げていく無限の可能性を持った後輩の皆さん、どうかこの県和商を誇りに思い、更なる発展のために頑張って下さい。そして、すばらしい思い出づくりに励んで下さい。

生徒会長 谷口 雄一

相撲

団体5人制でV飾る 個人戦 高岡が2階級初制覇

平成十年度県高校相撲春季大会はこのほど、海南市の藤白神社相撲場で開かれ、県和歌山商、箕島、新宮の三校が出場。三人制、五人制の各団体戦と無差別級、九十㌔以下級、九十㌔超級の各個人戦で〝県ナンバー1〟の座をかけ白熱した取組を繰り広げた。団体戦は三人制が新宮、五人制は県和歌山商がそれぞれ優勝。

個人戦は高岡鉄也（県和歌山商）が無差別、九十㌔級の二階級をそれぞれ初制覇。九十㌔以下級は山下俊亮（箕島）が初優勝を飾った。

第八十二回選抜高校相撲金沢大会（二十四日、金沢市）へは和歌山枠が三校のため、全校が出場する。近畿大会は十日、和歌山市の県営相撲場で行われた。

新23期生 松本 透

不易と流行を

基本を踏まえ先を見据えて

新2期生　井戸　幹雄

「不易流行」という言葉をご存じでしょうか。「不易」とは、いつまでも変わらないこと、守るべきことで、「流行」とは新しいこと、一時的なはやりを言います。人生には、この不易と流行を同時に身につけ、簡単には変えてはならないことと、時代の流れに沿っていち早く脱皮しなければならないことがあります。

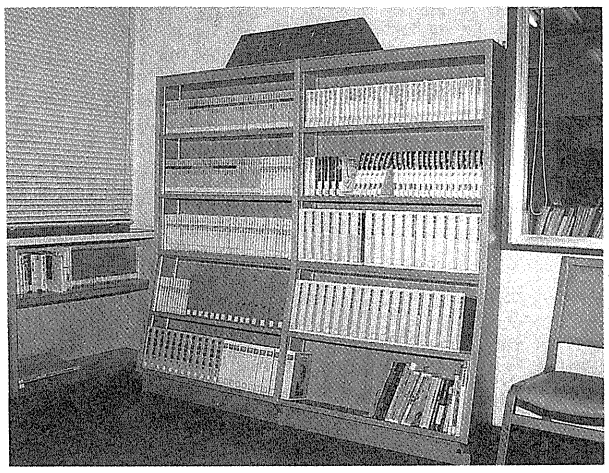
ひるがえって、皆さんのような高校時代にはこの「不易」に重点を置いて、これからの人生に向け、基本的に身につけるべきことを学んでおられることと思います。教室での勉強のほかに、様々な活動があります。それらは「教養」の蓄積に大変役立ちます。

からだを鍛えること、本を読むこと、思索をめぐらすこと、そんなことはいつでも出来ると思っていたら、大きな間違いです。やがて日々の繁忙にまぎれて「不易」を積み重ねることの難しさを痛感することになるでしょう。いくら映像の時代とは言え、読書は人格の形成に欠くことのできない大切な作業です。

このたび、藍綬褒章を受賞させて頂きましたのを機に、ささやかな発意ですが、図書館内に「井戸文庫」というものを作って下さることになりました。ここには先生方のご努力で、様々な分野の書籍が並べられることになります。そしてそこに、私の専門分野である印刷に関連した本を毎年お送りし、井戸文庫を充実させ、育てて頂いた学校に、また印刷を勉強しようとして下さる後輩への感謝の気持ちを表したいと考えております。

皆さんは印刷産業というものに、どんなイメージをもっておられるでしょうか。かつての3K（危険、汚い、きつい）職場は昔の話です。今はコンピューターと鮮やかな色彩に囲まれた未来型の先端産業の一翼を担っています。私は、和商を昭和28年3月卒業、山一証券勤務を経て、昭和42年から30年間不二印刷株式会社の社長として、印刷業を天職と一途に不易流行を重ね、本日に到りました。皆さんも、基本をしっかりと踏まえ、時代の先を見据えた人生を送られることを願っております。

写真は図書館内の「井戸文庫」



講演の機会を得て

新第24期　前田　慶一郎

卒業して23年、久しぶりに母校を訪れることになりました。

バレーボール部の後輩指導で、二～三度母校を訪れましたが、その時は卒業後間もないこともあり、特に変化も感じられませんでした。

しかし、今回はそれから20数年が経ち、当時のそれとは大きく変わっていました。

校門を入ると同窓会々館や視聴覚教室の新築校舎をはじめとして、中庭や学生食堂も当時とは一新し、ずいぶん立派になっていました。私達が学んだ時の夏が暖房、冬は冷房のプレハブ校舎が、今では懐かしく思い出されます。

訪問のきっかけは、母校で講演する機会をいただいたことです。10月27・29日の両日で情報処理科、国際経済科、会計科の「ビジネスマナー」を選択している3年生を対象に講演しました。講演といっても、私の場合は演壇の上からの演説ではなく、むしろ生徒と会話をしながらコミュニケーションをとりつつ「話しの中から何かを得てくれれば…」との講演スタイルになりました。

そこで、私の在籍した一九七二～一九七五年当時と、現在の学校状況の違いから話しを始めました。男女生徒の比率は男子1に対して女子2であったのが、現在では1対3となり女子生徒がさらに増えていることや、大学・短大・専門学校への進学率が、当時1割にも満たなかったのに対して、現在では6割が進学希望と聞き私自身も驚きました。さらに驚いたことは、講演を聞いている生徒の母親が私と同級生であることがわかり、（当時の卒業アルバムを持参していた）年月の経つのが非常に早いことを、あらためて感じさせられました。

内容的には

一、就職（職場）について

一、基本的なこと（挨拶・時間の管理の大切さ）

二、失敗した時の対応ぎ（クレーム処理や報告の重要性）

三、その他、社会人として必要なこと。（日本経済新聞の効率の良い読み方）

その他

一、人とのつながりの大切さについて。

二、教わること、教えること。

三、ビデオの視聴。

以上の内容で約一〇〇分にまとめて講演を終了しました。内容については、現在の勤務先（大阪電子専門学校）で同様な授業を担当していることもあり、また、新入社員教育をしていた経験をふまえ十分検討し講演をしましたが、お役に立てたかどうかは不安がありました。その後、あるOBの方から講演が好評であったことを聞き「ほっとした」気持ちになりました。

講演を終え、放課後のクラブ活動にも顔を出させて頂きました。

県和商のバレーボール部は、男女共に名門校であり男子においては、私が入学する以前から国民体育大会・インターハイ・春の高校バレーと毎年県代表となり、県内では無敗を誇っていました。

しかし今では、男子バレー部は少子化と特に男子生徒の減少から、部そのものは存在するものの、ほとんどが素人でバレー部を存続させるために一所懸命練習に励んでいました。また、女子バレー部においては、今でも厳しい練習を夜遅くまでおこなっていましたので、私も最後まで練習を見学させていただきました。

校舎や校庭などは、当時と大きくかわっていましたが、20数年前とかわらない良い伝統が県和商にはあります。

それはクラブ活動をしている部員は、外部からの来校者全員に対して、大きな声で挨拶していることで、今でも続いていることが大変嬉しく思いました。

このような伝統は、これからも永久に受け継いでいってほしいものです。

私自身にとっては、バレーボールという存在が切っても切れないものであり、県和商を卒業後も、大学時代（日本大学　法学部に進学）実業団時代（朝日生命保険相互会社に勤務）、さらに現在の勤務先（大阪電子専門学校のバレー部監督）でバレーボールに携わっています。

昨年は幸運なことに、7月に発足した全国専門学校バレーボール選抜（ALL JAPAN）チームの男子監督に任命され、去る12月21日～27日まで中国（北京・天津）に海外遠征をして4校の大学と対戦させていただきました。（月刊バレーボール誌2月号に掲載予定）

今回の講演は、私にとっても大変有意義な体験となりました。

これからも、機会があれば母校を訪れ、微力ではありますが少しでも後輩のお役に立てればと思っております。

いま子どもの心は大人のとまどい

新21期生　上野　和久《臨床心理士》

「いま、教育の現場」では、様々な事が生じています。不登校、家庭内暴力、学級崩壊等今までは考えられなかったことです。どうしてこんな事が起こるのだろうと考え込む時がありませんか。

最近、ある幼児教育に携わっているカウンセラーと話す機会がありました。そこで「子どもの保育や幼児教育で、子どもと同時に教育しなければならない母親が増えてきているのですよ。」という話がでました。よく話を聞くと、親が親として、どのように子どもに愛情を注げば良いのかわからないということなのです。

子どもは自然と愛情を受け取る力を持っています。子どもは、成長するにつれてその「受け取り方」と「返し方」を幼いときから身につけ年齢に応じて変化していきます。しかし、親が子どもに愛情を注ぐのに戸惑いがあったとしたら、子どもにはそれらの力は育ってきません。逆に、子どもの側に愛情の受け取り拒否が生じてきます。それは、子どもの「心のSOS」サインなのです。そのサインに大人が気づかない時は、もっと大きなサインを出すことになるでしょう。

思春期になって「親のいうことを聞かない」「反発する」と言うのは、大人になるための（自立するための）作業です。しかし、今の高校生の中には大人になるための反発ではなく、大人の愛情をうまく受けとめられずに「愛されたい寂しさ、辛さ、空しさ」のサインとして「反発」や「親の心を悩ます行動」を出しているように感じるのです。

ここに、今までは考えられない高校生の行動が生まれてくるのではないでしょうか。高校生の問題行動の意味付けを自立のためのサインか、愛情を受け取れない苦しみのサインなのかそれを見抜く力が、大人に必要なのです。

では、なぜ親は子どもにうまく愛情を注げないのでしょう。それは、その親の問題だけではないと思います。現実問題として「時間！時間！」と急かされる毎日、経済的な合理性を家庭の中まで浸透させていますゆっくり物事を味わったり、相手の目（心）を見つめて話し合ったりする時間を今どれだけもてているでしょうか。時間という流れの中でより早く動こうとしている自分を感じていませんか。

しっかり、「今」を感じ、「子ども」を見つめる時間を大切にしたとき、子どもが受け取れる愛情をだすことが出来るのではないでしょうか。

出席者の熱気満ちあふれ

新九期生同窓会催す

私達県立和歌山商業高等学校第九期生は、昭和三五年に十クラス、五二一人が卒業している。在学した昭和三三～三五年当時の、社会情勢を振り返えると、空では米ソによる人工衛星の打上げが宇宙へのロマンを掻きたて、一方日本経済は岸内閣の下、岩戸景気を謳歌し、カラーテレビ放映開始の時代でありました。しかし我々の入学当時には旧軍隊の兵舎を利用した薄暗い教室でもって、勉強に又スポーツにと元気に過したものでした。

時代は移り、オイルショックを経て、バルブ経済の崩壊と共に未経験の不況に突入している昨今において、一部の有志により、同窓会を開こうという声があがりました。当同窓会は過去に一度、昭和六〇年に紀ノ国会館において、約一七〇人が参加して開催しており、今回、何度も有志、世話役による事前の打合せや準備も、当事者の努力によりスムースに行なわれた。そして二回目となる同窓会は平成十年六月六日に、マリーナシティーに建設されてオープン直後のロイヤルパインズホテルにて、開催いたしました。当日には五人の恩師（大矢、栗本、寺本、藤城、前中の各先生）が私共のために、ご多忙の中をわざわざ御参加いただき、久しく御壮健なお姿に接し、我々一同本当にうれしく感じた次第であります。

さて同窓生は全国より一八七名が出席してくれました。開会早々より各クラス毎のテーブルを中心に、三八年振りのグループやら、先生方を囲んだグループ等々が、長いタイムトンネルを一気に取り戻すべく、歓談に励む多数の輪が見られた。かつての紅顔の少年少女達も、今や熟年の貫禄が備わり、各方面で活躍している面々が、現況報告をしている者、情報交換をしている者、懐古に浸り邂逅に胸を弾ませる者、静かに耳を傾むける者等々、それぞれ学生時代の泰朴な面影を、少しは残しながらの懇談は、果てる事なく続いている。

盛りたくさんのスケジュールは、全員の尽力、協力により、予定通りに進められ、出席者の熱気は会場に満ちあふれた。窓外に波打つマリーナシティー沖、紺碧の海に名残りを惜しむかの様な太陽がようやく傾むく頃、限られた時間内ではあったが、過ぎ去った青春を想起し、クラスを越えて旧交を暖め合い、それでもって厳しい現実に対する明日への活力の一助になってほしいと念じつつ、盛大であった同窓会は又次回の再会を約して散会した。

第九期生　児玉　吉晴